

令和 3 年 6 月 18 日現在

機関番号：32689

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2019～2020

課題番号：19K23054

研究課題名(和文)『源氏物語』の表現世界に関する研究 複合動詞の役割に注目して

研究課題名(英文) Study of the expression world of "The Tale of Genji" - Focused on the role of compound verbs -

研究代表者

籠尾 知佳 (Kagoo, Tomoka)

早稲田大学・教育・総合科学学術院・助手

研究者番号：10843881

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 1,000,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、源氏物語の長編化の方法を読み解くために複合動詞の役割を考えた。2019は源氏物語の「見る」がつく複合動詞を整理し、複合動詞「見はつ」が源氏物語の正編に偏在しており、正編では「見はつ」を頻出させて長い尺度で婚姻関係の持続と終結の問題を追究していることを分析した。2020は源氏物語の続編に偏在する複合動詞を調査した。源氏物語の続編には、最後のヒロイン浮舟の苦悩に満ちた思索に「～はつ」「～棄つ」「～やむ」等の語が集中する。浮舟物語は終結を表す複合動詞を積みかけ、あらゆる葛藤と動揺の末に生き続けようとする浮舟の姿を描出し、いかなる結末も結末にならない重い課題を突きつけていることを分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

源氏物語は複合語を用い、人々の心の機微や人間模様を描いている。従来の源氏物語の複合語の研究は形容詞・形容動詞の複合語の用法に注目したものが多く、本研究では、源氏物語の長編化の方法を読み解くために複合動詞の役割を分析したところに意義がある。2019は源氏物語に特に多い「見る」がつく複合動詞を整理し、物語正編に偏在する「見はつ」が婚姻関係の持続と終結の問題を追求するための鍵語であると分析した。2020は物語続編に偏在する複合動詞を整理し、続編では、最後のヒロイン浮舟の思索に終結を表す複合動詞を集中させ、葛藤と動揺の末に生き続けようとする浮舟の姿を通してオープンエンドの物語を描いていると分析した。

研究成果の概要(英文)：In this study, I considered the role of compound verbs in order to understand how to make a long story of "The Tale of Genji". In 2019, I organized compound verbs about "seeing" of "The Tale of Genji". As a result, I found that the compound verb "Mihatsu" was concentrated in the main story of "The Tale of Genji". Then, I analyzed that the compound verb "Mihatsu" was used repeatedly in the main part of "The Tale of Genji" to pursue the problem of the continuation and termination of marriage on a long scale.

In 2020, I investigated compound verbs that frequently appear in the sequel "Uji Jujo" of "The Tale of Genji". As a result, in the world of "Uji Jujo", it was found that the words "-hatsu", "-sutsu", and "-yamu" are concentrated in the painful thoughts of the last heroine, Ukifune. In the final chapter of "The Tale of Genji", using compound verbs repeatedly that represents the end, draw a figure of Ukifune that tries to stay alive while suffering, it's depicts a never ending story.

研究分野：中古文学

キーワード：源氏物語 長編物語の手法 源氏物語の複合動詞の役割 鍵語 中古文学

1. 研究開始当初の背景

『源氏物語』の文章には複合語が多く用いられており、豊富な複合語が作中人物たちの心の微妙や複雑な人間関係の網の目を細やかに描き出している。『源氏物語』の奥深い表現世界は、多彩な複合語の存在によって支えられていると言ってよい。

従来の複合語を通した『源氏物語』の表現の研究は、国学的な観点から形容詞・形容動詞の複合語の用法に注目したものが多く、戦後間もない頃に、清水好子が『源氏物語』の動詞の中で複合動詞が非常に多いことを指摘しており（「物語と文体」『国語国文』1949年9月）、複合動詞から『源氏物語』独自の文体のあり方を捉えようとする方向性を示していたが、その後約70年が経つにも拘らず、複合動詞に注目した『源氏物語』の表現の研究はほとんど積み重ねられていないのが現状であった。一方、国語学の立場から『源氏物語』の複合動詞の語法や語の構成、史の変遷を考える論文が少しずつ発表されている。もちろん、国語学の論考は『源氏物語』の読解に役立つ有益な情報を与えてくれる。しかしながら、それらは古代語の性質を知るための言語資料として『源氏物語』を検討しており、異なり語数の報告や語の構成、語法の分類などの統計的な分析を重視していると考えられる。先行研究では、『源氏物語』にはなぜ複合動詞が多く用いられるのかということに着目し、物語の中に繰り返し現れる複合動詞を物語の展開に即して分析する試みはなされていなかった。そこで、本研究では、多彩な複合動詞がそれぞれの文脈や『源氏物語』の長編物語の展開において果たした役割を考え、重層的な構造を織りなす『源氏物語』の表現世界そのものを解き明かすために複合動詞の役割を分析することにした。

ところで、稿者はこれまでことばに即して細密な検証を重ね、『源氏物語』の表現世界を分析する研究を継続して行ってきた。その研究の中で、複合動詞の後項について「完了」を表す「～はつ」という一見微細な表現が、宇治十帖の世界に繰り返し現れることに気づいた。先行研究を調べると、すでに国語学の立場から『源氏物語』の「～はつ」が後項につく複合動詞の種類（異なり語数）の多さが指摘されていたが（東辻保和「平安時代の複合動詞後項について」『国語教育研究』1980.11）、『源氏物語』の「～はつ」が後項につく複合動詞は種類のみならず、用例数も非常に多いのではないかと考えたのである。実際に用例数を調査すると、『源氏物語』の中で「～はつ」が後項につく複合動詞の用例数は310例ほどあり、その中の約3分の1は宇治十帖に存在していることが分かった（小学館の『新編日本古典文学全集』の『源氏物語』の用例数を調査した結果による）。そこで、稿者は宇治十帖における「～はつ」が後項につく複合動詞の多さに着目し、「～はつ」が後項につく同類の複合動詞をそれぞれの文脈や物語の展開に即して丁寧に分析することによって、『源氏物語』の宇治十帖の表現世界の特質を明らかにした（「自己をどう認識するか—『源氏物語』大君・中の君をめぐる「～はつ」—」『物語研究』第18号、pp.57～71、2018.3・籠尾 知佳「『源氏物語』宇治十帖の「～はつ」—薫をめぐることばから—」『中古文学』第101号、pp.57～71、2018.5）。

ここで紹介した研究を行うことによって、稿者は、複合動詞を用いた表現方法に対する『源氏物語』の強いこだわりを感じた。そのため、これらの研究成果を踏まえて『源氏物語』に繰り返し用いられる複合動詞の存在を見つけ、それらの複合動詞が長編物語の構築にどのように作用しているのかを解き明かしたいと考えたことが本研究の開始当初の背景である。

2. 研究の目的

本研究の目的は、数も種類も豊富な複合動詞が『源氏物語』の多面的な人物像や重層的な物語の構築にどのように働いているのかという問題を考え、『源氏物語』の長編化の方法を読み解くために物語内の複合動詞を分析することである。

前節にも挙げたが、戦後間もない頃に『源氏物語』の複合動詞の多さと機能に注目した清水（1949）は、「非常に多くの意味と感情を一語にまとめようとする」ために、『源氏物語』が「複合動詞を徹底的に利用している」と指摘しており、物語内に隠された多層的な意味と作中人物たちの複雑で繊細な感情を表現する独自の手法として、『源氏物語』の複合動詞の存在を捉えていた。また、早くから江戸時代の国学者、萩原広道が『源氏物語評釈』の中で「語脈」（語のかゝりゆくすぢ）として注目していたように、『源氏物語』には、同類のことばを何度も繰り返すことで、様々な人物たちを関連付けたり、異なる場面と異なる場面を響き合わせたりしながら、物語を展開させる方法がある。稿者は、『源氏物語』は特定の人物・人間関係・場面ごとに多彩な複合動詞を使い分け、同類の複合動詞を繰り返し用いることで、作中人物の微細な心の動きや複雑な人間関係を丹念に追求し、多層的な厚みをもった物語を展開させているのではないかと、という問題意識を持った。そこで、本研究では、長編としての『源氏物語』の表現世界を読み解くための方策として、『源氏物語』の中で繰り返し用いられている特定の複合動詞および同類の複合動詞の存在を見つけ出し、それらが個々の人物と人物、場面と場面とを結びつけてゆく様相を綿密に分析していった。

3. 研究の方法

2019年度は、『源氏物語』の中で「ある特定の複合動詞が繰り返し用いられる現象」に注目し、2020年度は、『源氏物語』の中で「同類の複合動詞が連鎖的に用いられる現象」に注目することで、長編としての『源氏物語』の重層的な表現世界を読み解いていった。

2019年度は、「見る」が上につく複合動詞の中から一つの複合動詞を選び、「ある特定の複合動詞が繰り返し用いられる現象」について考察することにした。「垣間見」「国見」などのように、古代世界において、「見る」という行為は支配・所有の意味を含み持っており、従来の『源氏物語』の研究においても、「見る」ことが作中人物たちの関係性や物語の全体像を把握する重要なキーワードとして捉えられてきたという問題を重視したからである。

まず、基礎的な研究として、『源氏物語』における「見る」が上につく複合動詞に着目してそれらの整理を行った。具体的には、『平安時代複合動詞索引』（清文堂、2003）・『日本古典対照分類語彙表』（笠間書院、2014）・『源氏物語語彙用例総索引』（勉誠出版、1994）という3種の索引類を用いて『源氏物語』に出てくる「見る」が上につくすべての複合動詞の種類・用例数・巻ごとの分布を調べ、それらが一覧できる表を作成した。表が完成した後には、『源氏物語』の「見る」が上につく複合動詞の中で多用されているものに丸をつけ、それらのうち、『源氏物語』の第一部・第二部・第三部などの各部やある巻に偏在する複合動詞の存在を探し出すことにした。これらの手続きを通し、「見る」が上につく複合動詞のうち、「見知る」「見つく」に次いで3番目に多い用例数を誇る「見はつ」が『源氏物語』の正編（桐壺巻～幻巻）の世界に多用されていること、中でも「見はつ」は第一部の真木柱巻に頻出しており、その次にこのことばが多く用いられているのは第二部の若菜下巻であることに気づいた。このように、『源氏物語』の複合動詞「見はつ」の特徴的な分布について確認できたので、2019年度は、『源氏物語』の正編の世界で、「見はつ」という「特定の複合動詞が繰り返し用いられる現象」について考察することに決めた。

次に、複合動詞「見はつ」は果たして『源氏物語』の正編の世界だけに多用されているのか、『源氏物語』の「見はつ」の用法は独自のものであるのかという問題を探るために、『源氏物語』以外の平安朝文学作品における「見はつ」の用例数を調べ、一つ一つの用例にあたっていった。この手続きを踏み、その他の平安朝文学作品の用例数や用例と比較することで、複合動詞「見はつ」を特定の人物や人間関係・場面の中で繰り返し用いるのが『源氏物語』特有の表現方法であることを確認した。最後に、『源氏物語』における複合動詞「見はつ」の用例を正編の物語の展開に即して綿密に検討し、その独自の表現方法について分析した。

2020年度にはまず、前年度の研究を踏まえて『源氏物語』の続編（匂宮三帖と宇治十帖）の「見はつ」という複合動詞の用例を検討した。すると、正編では他者に向けて使われることが多い複合動詞「見はつ」は、続編では自己に向けて使われることが多くなっていることが分かった。この検討によって、『源氏物語』の正編と続編とで複合動詞の用法が異なっていると考えたことから、『源氏物語』の続編の世界に偏在し、特徴的な現れ方・使われ方をしている複合動詞を調査・分析することにした。

基礎的な作業として、2019年度と同様に、『源氏物語』の続編に出てくるすべての複合動詞の種類・用例数・巻ごとの分布を調べてそれらが一覧できる表を作成したが、この表を完成させることで、『源氏物語』の続編には、物語の最終章（手習巻・夢浮橋巻）で、「～はつ」「～棄つ」「～やむ」といった終結を表す語が集中しているという現象を見つけ出すことができた。

よって、2020年度は、『源氏物語』の最終章に終結を表す「同類の複合動詞が連鎖的に用いられる現象」に注目することにし、手習巻・夢浮橋巻の「～はつ」「～棄つ」「～やむ」の用例を綿密に検討しながら、これらの語を積みかける浮舟の物語の表現構造について分析した。

4. 研究成果

2019年度は、『源氏物語』において「ある特定の複合動詞が繰り返し用いられる現象」に着目した。具体的には、まず、「支配・所有」の意味をもち、『源氏物語』の全体像を把握する重要な鍵語として捉えられてきた「見る」ことに注目し、『源氏物語』の「見る」がつく複合動詞を整理し、表にまとめた。この整理によって、『源氏物語』の中で特に多い「見はつ」という複合動詞がこの物語の正編の世界に偏在していること、特にこの語が多く用いられているのは第一部の真木柱巻であり、その次にこの語が用いられるのは第二部の若菜下巻であるという特徴に気づいた。さらに、『源氏物語』以外の平安朝文学作品と比較することによって、複合動詞「見はつ」は『源氏物語』にのみ突出しており、「見はつ」の多用が『源氏物語』独自の表現方法であることが確認できた。

この調査を通し、複合動詞「見はつ」は『源氏物語』の正編の世界を織りなす鍵語であると考えたので、『源氏物語』の正編に多用される「見はつ」を物語の文脈に即して綿密に検討した。その結果、複合動詞「見はつ」が『源氏物語』中に最も多く使われる第一部の真木柱巻では、髭黒とその北の方の離婚騒動の中で、この夫婦の関係性の持続と終結の問題を悲喜劇的に描くために「見はつ」ということばが繰り返されていることを明らかにすることができた。この研究の成果は、論文「『源氏物語』真木柱巻の「見はつ」一夫婦関係の持続と終結をめぐる一」（『古

代中世文学論考』古代中世文学論考刊行会、第40集、2020年3月)としてまとめている。

次に、『源氏物語』の中で、真木柱巻の次に若菜下巻に複合動詞「見はつ」が使われていることに注目し、若菜下巻における複合動詞「見はつ」を文脈に即して丁寧に検討した。すると、若菜下巻の「見はつ」はすべて光源氏と紫の上の会話や心中思惟に現れており、先に分析した真木柱巻の髭黒とその北の方の「見はつ」の用法と非常によく類似していることが分かった。

このように、2019年度は「見はつ」という「特定の複合動詞が繰り返し用いられる現象」に注目することで、『源氏物語』の正編が複合動詞「見はつ」を多用し、脇筋である第一部の髭黒とその北の方の物語と本筋である第二部の光源氏と紫の上の物語を接続させ、長い尺度で中年にさしかかった夫婦の婚姻関係の持続と終結の問題を丹念に追求していると結論づけた。

2020年度にはまず、前年度の研究を踏まえて『源氏物語』の続編の世界に現れる複合動詞「見はつ」を検討した。すると、『源氏物語』の正編では、他者に向けて使われることが多い「見はつ」ということばは、続編では自己に向けて使われることが多いことに気づいた。そこで、『源氏物語』の正編と続編で複合動詞の用法が異なっていると考え、『源氏物語』の続編に出てくる複合動詞の種類・用例数・巻ごとの分布を調べ、それらが一覧できる表を作成した。この整理によって、続編では、『源氏物語』の最終章に位置する手習・夢浮橋巻において、最後のヒロイン浮舟が苦悩の末に自身の最終的な生き方や判断を示そうとする文脈に、「～はつ」「～棄つ」「～やむ」といった終結を表すことばが集中するという現象を見出すことができた。

よって、2020年度は『源氏物語』に「同類の複合動詞が連鎖的に用いられる現象」について、手習・夢浮橋巻に現れる「～はつ」「～棄つ」「～やむ」ということばに注目して分析することにした。その結果、終結を表す複合動詞を積みかける浮舟物語は、あえてそれらのことばを連鎖的に用いることで、いかなる結末も結末にならない重い課題を突きつけ、あらゆる葛藤と動揺の末に生き続けようとする浮舟の姿を丹念に描いていることを読み取った。『源氏物語』の最終章では、決着を語ることにない未完の物語のあり方を強く印象づけるために、終結を表す複合動詞を連鎖的に用いているのである。この研究の成果は、論文「手習巻・夢浮橋の浮舟をめぐる「～はつ」・「棄つ」・「やむ」—物語をどう閉じるか—」(『古代中世文学論考』古代中世文学論考刊行会、第43集、2021年5月)としてまとめている。

「1. 研究開始当初の背景」で挙げたように、戦後間もない頃に清水(1949)が『源氏物語』の独自の手法として複合動詞の多さとその用法に注目して以来、約70年を経ても、『源氏物語』の表現世界を読み解くために複合動詞の役割を考察した研究はほとんど積み重ねられていなかった。清水(1949)の発表後に『源氏物語』の読解のために複合動詞に注目した論文はこれまでに2本発表されているが、それらの先行研究では、ある特定の場面にほんの数回出てくる複合動詞の分析に留まっており、『源氏物語』の中で用例数の多い複合動詞に着目し、複合動詞の多用を通して『源氏物語』という長編物語の方法を考える試みはなされてこなかった。一方、本研究では、『源氏物語』の正編に繰り返し現れる複合動詞「見はつ」の分析を通して正編の物語の重層性を読み解き、『源氏物語』の続編に連鎖的に現れる「～はつ」「～棄つ」「～やむ」といった終結を表す同類の複合動詞の分析を通して『源氏物語』の結末のあり方を読み解いた。この点において、研究計画当初に掲げた目標通り、複合動詞を通して『源氏物語』の重層的な表現世界と長編化の方法を読み解くという一定の成果をあげることができたと考えている。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 2件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 筆尾知佳	4. 巻 40
2. 論文標題 『源氏物語』真木柱巻の「見はつ」 夫婦関係の持続と終結をめぐって	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 古代中世文学論考	6. 最初と最後の頁 28～56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 筆尾知佳	4. 巻 43
2. 論文標題 手習巻・夢浮橋巻の浮舟をめぐる「～はつ」「棄つ」「やむ」 物語をどう閉じるか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 古代中世文学論考	6. 最初と最後の頁 119～149
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計0件

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------